

1967年（掲載誌、発行元不明）

■アプローチ

言葉で目標を考えるな



こんなことを言うと何を馬鹿なことを言うかと言われるであろう。考えるというのは確かに言葉によって可能なのであるから、言葉を使うなどいえば、考えるなどというに等しい。科学の発達はある意味で言葉の発達でもある。自然や社会の事実をあらわすのに科学は言葉を次々へとつくり出した。だから言葉がなければ科学することはできなかつたともいえる。

しかしやっぱり、科学の本質は言葉以前の世界にある。身体で自然を測定することが言葉以前にあるのである。極めて素朴な例をあげる。私は今机の前に坐っている。煙草が目にとまる。それを手をのぼしてとる。手だけではとどかなければ、立ちあがってとって来る。私は煙草までの距離を身体で測定しているのである。それが手をのぼしたり、立ちあがったりする表現行動をひきおこすのである。距離をはかるというのは、身体で測定することが先行する。それが言葉によって言いあらわされる。言葉の使用によって距離の測定はきめがこまかくなる。それが何メートル何センチとなる。ここに科学の発達がある。

しかしそれと同時に、行動の世界から見る世界に入る。行動の世界は、いつも身体尺度で測定し、表現する。科学の世界はそれを見るものとして、きめ細かく表現する。しかし、行動の世界は言葉では十分に表現できない。六割か八割位とみてよ

いであろう。

教育の目標を考えるとき、行動できる世界を考えるなら、言葉だけで考えてはだめである。言うことができる、理由を述べることができる、暗唱することができるなどというのはナンセンスに近い。その言葉の背後に、事実の行動として、何があるのかをとらえなくてはならない。

言葉だけにたよる病気をなおさなくては、本当に人間を育てられないだろう。われわれは長い間言葉だけにたよってものを考える習慣の中にあつた。学習指導要領の目標などがそのよい例である。そういうことが長い間続いているうちに、いつの間にか、その言葉によってあらわされる事実は何か、具体的な人間の行動は何かということのみをみるという習慣をなくしてしまった。事実をみないで、言葉だけで考えて行く習慣ができてしまった。

言うことができるといった目標をおくから、言葉を暗記するといった教育になって来るのである。それが受験勉強を生み出すのである。日本における教育の病弊は言葉にたよりすぎるということからおこっているといつてもよいのである。

教育工学の方向は、人間行動の実体から出発するという精神を堅持しなくてはならない。このことが忘れられて、末梢技術に陥るならば、教育革新の原理とはならないであろう。

矢 口 新